



## ▼日本と国際社会で輝くために▼

校長 小田 恵

「ヴィアトール学園の祈り」（生徒手帳 p11 に記載）の中に、「主よ、私たちが、日本と国際社会の中でいきいきとした力になり、『互いに愛し合いなさい』というキリストの言葉を常に心にとめて生きることができますように。」とあります。この祈りの通り、数多くの洛星の卒業生が日本にとどまらず、国際社会の中で様々な形で活躍してくれています。その中には、この春から東ティモール特命全権大使となられた木村徹也氏（24 期生）もいらっしゃいます。東ティモールは、かつてはポルトガル領でしたが、1975 年にインドネシアに併合され、独立運動や抗争等、様々な困難を経て 2002 年に正式に独立を宣言し、東ティモールが国家として誕生しました。しかし、依然として政治的・経済的な課題に直面しており、国際社会の支援が必要とされています。

先日 NHK の朝の番組で、「盗まれた子どもたち」というショッキングなタイトルで東ティモールの現状と問題が取り上げられていました。「盗まれた子どもたち」とは、1999 年の独立投票前後に、インドネシア軍や民兵によって多数の子どもたちが誘拐、盗まれたことを指します。インドネシア側によると、これらの子どもたちは孤児や家族に残された子どもたちだったとされていますが、実際には多くの子どもたちは強制的にインドネシアに連れ去られ、家族から引き離されたようです。2002 年の独立宣言後、東ティモール政府はこれら盗まれた子どもたちを探すため、重要な役割を果たしたカトリック教会の支援を受けて、国内外で捜索活動を開始しました。これまでに 400 人以上の子どもたちが発見され、家族と再会することができましたが、未だに数百人の子どもたちが行方不明のままで、家族を探し続けています。この問題の解決に向け、東ティモール政府や国際社会、そして関係者たちが協力して取り組んでいます。

この問題以外にも、東ティモールには現在もさまざまな混乱・困難があるのですが、その地で木村大使は様々な取り組みをされています。地方の学校を訪問して、援助の働きかけなどの活動もなさっています。春にいただいたメールでは、現地のイエズス会学校で校長としても奉仕しておられる村山兵衛神父様からの「この子どもたちは、日本の生徒からすれば、信じられない環境で学んでいるわけですが、子どもたちには、日本にない明るさがあります。現地の環境は写真で伝えることは難しく、田舎はどこでも同じですが、水を確保することが課題で、停電すれば、水が止まってしまう」といったレポートを紹介していただき、「当地との交流で洛星の生徒たちが何かを感じとってくれることを期待したい」という大使の願いも伝えていただきました。村山神父や木村大使のお力を借りて、洛星にいる私たちが、遠く離れた東ティモールのことを「隣人」としてとらえられるようになれば、と私も強く願います。

身近な世界はもちろん、国際社会の現状について正確な知識を得、共感するという体験を通して、ヴィアトール学園で学ぶ若者が「国際社会の中でいきいきとした力」として輝くことができますように。